子どもはみんな問題児。を読んで

　中川季枝子さんは私が好きな絵本の作者であり、この本も気になる本の１つであった。「子どもはみんな問題児。」というタイトルを見たとき思わず今自分が担任している子ども達を思い浮かべてしまい、我に返り笑ってしまった。読み進めていくうち共感することがたくさんあった。

　まず、「お母さんが知らない、保育園での子どもたち」では、幼稚園での子どもの姿を頭の中に思い出していた。お母さん自慢、子どもはなかなか紳士、など共感する点がたくさんあった。中でも、「お母さんのお弁当をどんなに喜ぶか、見せてあげたい」というところに大きくうなずきたくなった。週に二回のおうちのお弁当の日、保育室に入ってきた途端に私にお弁当自慢が始まる子もいる。いただきます、をしてすぐは全員がお弁当自慢をしている。正直大人の目から見ると、もうちょっと・・・と思ってしまうようなお弁当もあるがそんなところは子どもにとってはどうでもいいようだ。幼稚園にいてもお母さんを近くに感じられ、お母さんが作ってくれたということが重要なのである。「先生見てー！○○がはいっていた」と嬉しそうに、大事そうに見せてくれるあの時間が私は大好きである。あの良い表情でお母さん自慢をするところを保護者の方に見せたいなと常々思っている。

　しらさぎ幼稚園で働く身として「本は子どもと一緒に読むもの」のところは大切にしたいと感じる部分であった。絵本や物語の嫌いな子はいない、もしいるとしたら大人の与え方が下手だった。と読み、はっとした。私は毎日、どんな反応をするか、これは好きそう、これは長すぎるか・・・など子どもとの絵本の時間を想像しながら絵本を選んでいる。こちら側としては、保育の導入としてのことを考えたり、集中力のことを考えたりしているがおしつけがましくなっていないか。それらのことを考えつつも、子どもが楽しいと思うことを一番にしたいと改めて思った。「子どもにおもしろい本は、大人にもおもしろい」には深く共感した。読み聞かせをしていく絵本の中でなかには私自身が好きではないものもある。そういうとき子どもたちもあまりいい反応をしないことが多いように感じる。絵本に対する保育者の気持ちが気づかないうちに子どもに伝わっているのも要因かと思う。しかし、大人がおもしろいと感じるものは子どももおもしろいのではないかとも思う。

　今回書ききれないほど共感するところ、ハッとさせられたところがたくさんあった。最後に一番大切にしたいと感じたのが、子ども時代にしかない純情さ、真剣さ、素直さ、子どものおもしろさを日々の保育で見逃さないようにしたいと感じた。短い、幼児期にしかないおもしろさをたくさん発見していきたい。